The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記：ヒロイン像の変容をめぐって
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記
―ヒロイン像の変容をめぐって―

渡辺貴規子

１　はじめに

英仏百年戦争でイギリス軍に包囲されたオルレアンの街を解放し、フランス国王シャルル七世を戴冠式へと導いたジャンヌ・ダルクは、日本でも明治時代初期から書籍・雑誌の中で紹介されてきた。そして明治 30 年代半ばに少女雑誌という女児専用のメディアが誕生した後には[1]、複数の少女向けの読み物において伝記が掲載された。周知の通り、ジャンヌ・ダルクが歴史の舞台に現れたのは約二年間のみである。彼女は 17 歳で故郷の村を離れ、戦士としての使命を全うした後、19 歳で火刑に処され非業の死を遂げた。明治時代後期の少女雑誌の言説が良妻賢母主義的規範の影響を強く受ける中、妻にも母にもならずに若くして亡くなったジャンヌの姿は、どのように語られたのであろうか。本稿では、明治時代後期に刊行された、少女向けの書籍・雑誌におけるジャンヌ・ダルク像の特徴とその変容について考察したい。

本稿で検討するのは、明治 30 年代後半から明治末期に刊行された三つの少女雑誌に掲載された作品、および少女読者向けの書籍に収録された二つの作品である。いずれも書籍・雑誌のタイトルに「少女」という語を冠する。刊行年の古い順から列挙すると、『外国少女鑑』（博文館、1902 年）所収「ジヨアンダーク（仏蘭西）」[2]、『少女界』掲載の「仏国の女将軍」（1906 年）[3]、『少女世界』掲載の「ジヤンヌダアク」（1907 年）[4]、『少女鑑』（金港堂書籍、1910 年）所収「ジヤン・ダーク」[5]、『少女の友』掲載の「女の乃木大将オルレアンの少女」（1912 年）である[6]。『少女界』、『少女世界』、『少女の友』は明治時代後期の代表的な少女雑誌であり、『外国少女鑑』、『少女鑑』は若い女性の模範的な徳行を記した例話集で、『婦女鑑』（1887 年）などの成人女性向けの例話集を模した書籍である。

明治時代に出版されたジャンヌ・ダルクに関する文献についての先行研究には、高山一彦の研究と渡邊洋子の研究とがあり[7]、両者ともにジャンヌ・ダルクを日本に初めて紹介した『西洋英傑伝』（1869 年）以降の単行本、新聞記事、雑誌等におけるジャンヌ・ダルクの表象の変遷、および変遷の背景にある社会的要因に迫っている。しかし、両者の研究では、一部のわずかな作品を除き、児童向けの作品は考察の対象とされず、少女向けの読み物については言及されていない。筆者はこれまで、『西洋英傑伝』所収のジャンヌ・ダルク伝[8]、明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記の特徴について論じたことがあるので[9]、本稿を加えることで、明治時代刊行の児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記について概観できることになり、先行研究を補完することも期待できるだろう。

第 2 節以降の本稿の構成は次の通りである。第 2 節では、少女雑誌というメディアが誕生

※明治時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略・付加した。また、合略仮名については分解して表記した。

[1] 本稿第 2 節参照。

[2] 下田歌子「ジヨアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、博文館、1902 年、127-136 頁。

[3] 岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』第 5 巻 2 号、1906 年 2 月、53-59 頁。

[4] 沼田笠峰「ジヤンヌダアク」『少女世界』第 2 巻 7 号、1907 年 5 月、50-55 頁。沼田笠峰「ジヤンヌダアク」『少女世界』第 2 巻 8 号、1907 年 6 月、85-90 頁。

[5] 金港堂書籍株式会社編集部「ジヤン・ダーク」『少女鑑』、金港堂、1910 年、161－194 頁。

[6] 鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』第 5 巻 13 号、1912 年 11 月、18-21 頁。

[7] 高山一彦「明治日本におけるジャンヌ文献」『図録　ジャンヌ・ダルク展』, 1982 年、176-178 頁。高山一彦『ジャンヌ・ダルク―歴史を生き続ける「聖女」』、 岩波新書、2005 年。渡邊洋子「明治におけるジャンヌ・ダルク」、『独文学報』第 14 号、1998 年、 1-20 頁。

[8] 拙稿「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象 ―『西洋英傑伝』を中心に」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第 67 巻、2019 年、422-412 頁。

[9] 拙稿「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」、『言語文化の比較と交流 8』(大阪大学大学院言語文化研究科・言語文化共同研究プロジェクト)、2021 年、43-52 頁。

する以前のジャンヌ・ダルクの伝記について、児童読者が意識されたと思われるものを中心に整理する。第 3 節では、本稿で取り扱う各作品の基本的事項をまとめ、第 4 節では、少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルク像の特徴とその変容について考察する。第 5 節で、その変容の背景について述べる。最後に第 6 節でまとめを付す。

２　少女雑誌誕生以前の児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記

筆者の調査では、1868（明治元）年から 1912（明治 45・大正元）年に日本で出版されたジャンヌ・ダルクに関する記事および単行本は 65 件に上り[10]、最も早く出版されたのが『西洋英傑伝』所収「二編上　仏郎国女傑如安之伝」（1869 年）である。『西洋英傑伝』は、児童読者が意識されつつ書かれたと言える。原典はスコットランドの女性作家、マーガレット・フレイザー・タイトラー（Margaret Fraser Tytler）による児童向け伝記集、*Tales of the Great and Brave* シリーズ全二巻（1838-1840 年）であり、翻訳者の作楽戸痴鶯も児童への読み聞かせを意識して翻訳した[11]。また、この書物は世界史教育と国語教育に貢献した翻訳啓蒙書の一冊であり、明治時代初期の学校教育現場で読まれた可能性が高い。「学制」（1872 年）頒布直後から世界史の教科書の一冊として使用され[12]、国語教育の場でも、小学校で読まれる読本の一冊として「文部省布達・第五八号」（1873 年 4 月 29 日）の指定を受けた[13]。

高山一彦が『西洋英傑伝』でジャンヌ・ダルクは「〈愛国心〉の典型」、「無双の女勇士」として描かれたと指摘した通り[14]、この作品では戦闘の場面が活写された。ジャンヌの慈悲深さ、優しさにも言及される一方で、「烈敷（はげしき）号令」、「女将軍」、「豪猛なる勇威」などの言葉で、ジャンヌは人並外れた勇敢さを持つ強い女性として描かれている[15]。

その後、『世界蒙求 前編』（1873 年）、『各国英智史略』（1873 年）、『世界智計談 中』（1874 年）、師範学校編『万国史略 巻二』（1874 年）、西村茂樹編『校正万国史略 巻之六』（1875 年）、『仏国史略 巻之三』（1875 年）、『法蘭西志（ママ）』（1878 年）、『東西蒙求 巻之二』（1884 年）、『仏蘭西史』（1890 年）など、多数の世界史・フランス史の教科書でジャンヌ・ダルクの挿話が相次いで紹介され、明治 20 年代には児童雑誌・少年雑誌の中で伝記が繰り返し掲載された[16]。その最初は『穎才新誌』に掲載された読者の投稿作文「女傑ジョアンダーク伝」である[17]。内容は坪谷善四郎著『仏蘭西史』（1890 年）の記述がほぼそのまま抜粋された 2000 字に満たない短い文章であった[18]。しかしその後、文学・歴史を題材とする読み物に注力した少年向け総合雑誌の出版が本格化すると、デヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）『イングランド史』（*The History of England,* 1754-1762）の挿話の翻訳[19]、思想家の高山樗牛が独自に執筆したジャンヌ・ダルク伝が発表され[20]、読み物

---

[10] このうちの 58 件については、以前拙稿にリストを掲載したので参照されたい（拙稿、前掲「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象」、412 頁）。これに加え、以下の 7 種の文献が 2021 年 4 月までに確認されたのでここに列挙する。作楽戸痴鶯他編『万国史略　中編下』、文部省、1874 年；西村兼文『外国史略　巻三』、寿楽堂、1874 年；可笑生「女傑若安達亜克の偉勲」、『少年文武』、2 巻 3 号、1891 年；内田不知庵「如安外伝」、『読売新聞』、1893 年；岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』5 巻 2 号、1906 年；沼田笠峰「ジヤンヌダアク」、『少女世界』第 2 巻 7-8 号、1907 年；澤田撫松「将に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアンの少女」、『婦人くらぶ』（紫明社）、4 巻 10 号、1911 年。

[11] 拙稿、前掲「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象」、421-420 頁。

[12] 木全清博「万国史教科書の内容分析（1）」、『滋賀大学教育研究所紀要』第 22 号、1998 年、35-42 頁。

[13] 府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究』ひつじ書房、2014 年、19-20 頁。

[14] 高山一彦、前掲書、『ジャンヌ・ダルク』、13-14 頁。

[15] 作楽戸痴鶯、『西洋英傑伝』、英蘭堂、1872 年補刻（京都大学人文学研究所所蔵）、初編上、13 丁オ。

[16] 拙稿、前掲「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」参照。

[17] 江連松花「女傑ジョアンダーク伝」、『穎才新誌』、第 683 号、1890 年 8 月、2-3 頁。

[18] 拙稿、前掲「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」46-48 頁。

[19] 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第 89 号、1892 年 7 月、18-21 頁；同左、第 91 号、1892 年 8 月、14-17 頁。岳仙叟「如安達克」『少国民』第 9 巻 25 号、1897 年 12 月、5-17 頁。

[20] 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第 4 巻 27 号、1898 年、60-66 頁。

としての充実度も増した。

明治 20 年代の少年向けの伝記では、ジャンヌの美徳として信仰深さや慈悲よりも、「忠君愛国」の精神、強さ、勇姿が強調される傾向にあった。これは少年雑誌の読者が男児を中心とする児童であり、彼らを鼓舞する目的があったためと考えられる。例えば『穎才新誌』でのジャンヌは「忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及ンデ、勤王ノ念益々深」くする人物として描かれ[21]、『少年園』では「肝勇抜群」で「女性の常なる怯弱優柔の質を除却」した雄々しい女性であるとされた[22]。

このように『西洋英傑伝』以来、明治時代中期まで、児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記では強いヒロイン像が描かれた。それは児童向けの初めての単行本である中内蝶二『惹安達克』（1901 年）でのジャンヌ像にも引き継がれた。中内はジャンヌを「奇代の女丈夫」と表現し[23]、その功績を「武夫もなほ及ばざるの偉功」と称えた[24]。そして死を前にした彼女の態度さえも、「名を重むじて、不義の余命を貪らむと欲せず、凛乎たる節操厳霜の如く、千載の下、有髯男子をして後に膛若たうしむるに足れり」と書かれ[25]、彼女の武勲や強さが大人の男性に引けを取らなかったとされた。しかしながら、こうした雄々しいヒロイン像は、少女向けの読み物の中では次第に変容するのである。

３　少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記の出版

少女雑誌という女児専用のメディアは「少女」という概念とともに生まれ、少年雑誌よりも後で誕生した。明治時代半ばにおいて、「少年」という概念は男児と女児の両方を内包し[26]、『少年園』など「少年」という言葉を冠した雑誌にも女児の読者は存在した[27]。しかし日清戦争、日露戦争の二度の対外戦争の経験とそれに伴う国家主義の機運の高まりにより、国家に尽くし立身出世を目指すべき男児と、家内の役割を担う良妻賢母を目指すべき女児とがより明確に区別されるようになる[28]。たとえば『少年世界』の紙面に女児専用の記事を集めた「少女欄」が開設され（1895 年 9 月）、やがてそれが『少女世界』の創刊（1906 年）へと発展するように[29]、「少年」読者から「少女」読者は切り離され、明治 30 年代から明治末には『少女界』（1902 年創刊）、『少女世界』、『少女の友』（1908 年創刊）、『少女』（女子文壇社、1909 年創刊）、『少女画報』（1912 年創刊）など少女雑誌が相次いで創刊された。そして、1899（明治 32）年の高等女学校令により女学生の数が大幅に増えたことも、その背景として重要である。相次ぐ少女雑誌の創刊は女学生を中心とする年少の女性読者のニーズに実際に応えるものでもあった。

本稿第 2 節で言及した、児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルク像と少女向けの読み物におけるそれとを比較する際には、次の二点については少女向けの読み物の後発性を考慮に入れねばならない。第一に、文体の面で、漢語を多用する文語体から仮名が中心の言文一致体が主流となり、文章の印象が柔和なものに変化する点である。第二に、文章の長さの面で、少女向けの読み物に掲載されるジャンヌ・ダルク伝はそれ以前のものよりも長文で、かつ児童向けの読み物として分かりやすさ、面白さも追求される傾向がある。

---

[21] 江連松花、前掲「女傑ジヨアンダーク伝」、2 頁。
[22] 無署名、前掲「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第 89 号、19 頁。
[23] 中内蝶二『世界歴史譚第三十二編　惹安達克』、博文館、1901 年、104 頁。
[24] 同上、37 頁。
[25] 同上、107-108 頁。
[26] 「少年」「少年/少女」の概念の変容は以下を参照。田嶋一「「少年」概念の成立と少年期の出現」『国学院雑誌』95 巻 7 号、1994 年、1-15 頁。今田絵里香「「少年」から少年・少女へ―明治の子ども投稿雑誌『穎才新誌』におけるジェンダーの変容」『教育学研究』71 巻 2 号、2004 年、214-227 頁。
[27] 久米依子「メディアにおける〈少女〉の成立―雑誌『少年園』をめぐって」『目白近代文学』第 11 号、1994 年、17-26 頁。
[28] 中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変遷―マンガは「少女」をどのように描いたのか』出版メディアパル、2013 年、38-44 頁。
[29] 続橋達雄「〈少女〉欄の作品」『児童文学の誕生―明治の幼少年雑誌を中心に』桜楓社、1972 年。尾崎るみ「〈少女小説〉の源流―『少年世界』「少女」欄開設の背景」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第 7 号、2003 年、80-95 頁。中川裕美、前掲書、22-33 頁。

この二つの特徴を踏まえた上で、本稿で検討する五作品の基本的事項を、以下の①～⑤で整理したい。このうち、①の文章については出典が判明しており、かつ本稿第 4 節で述べるジャンヌ像の特徴とは異なる側面があるため、その点についても述べる。②～⑤は文章が掲載された書籍・雑誌に関する説明、文章の長さなど基本的事項と全体的な特徴を中心に簡潔に述べていく。

①下田歌子「ジョアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』（博文館、1902 年）所収

『外国少女鑑』は当時の華族女学校学監であった下田歌子が編集し、博文館から出版した「少女文庫」（全六巻）の一冊である。「緒言」では「我が国の外、東西洋諸国に聞えたる、はやくより、今にいたるまでの少女がすぐれたる事績[30]」を紹介し、「少女が忠貞孝義の言行を、更に今取捨補綴[31]」した同じシリーズの『内国少女鑑』と合わせて読むことが推奨される。先行研究では『婦女鑑』（1887 年）の強い影響が指摘され、『外国少女鑑』の 36 の例話のうち、14 の例話が『婦女鑑』と同じ人物を扱っている。『婦女鑑』は昭憲皇后の内意を受けて宮内省文学御用掛の西村茂樹が編纂し、宮内省蔵版として出版された後、華族女学校にも下賜されたためこのような影響関係が見られると推定される。[32]

『外国少女鑑』所収の「ジョアンダーク（仏蘭西）」は約 2500 字の比較的短い文章であり、『婦女鑑』の漢文体の硬質な文章を言文一致体に変換しつつ書かれた。

> われ初めて神の霊異を見しハ。十三歳のときにて。その形状を赫耀たる神霊あり。余に告て曰く。汝常に神を敬し。善事を行へ。神は必汝を保護すべしと。爾後昼夜の別なくその声常に耳に断えず。今こそわれ神の冥助に依りて。兵馬の権を握り。敵兵を打靡け。太子沙爾（シャルル）を奉じて。黎牧（レーム）府に即位の式を行わしめんとおもへり。（「若安達亜克」『婦女鑑 四』、宮内省、1887 年、44 丁ウ～45 丁オ。句点原文ママ）

> 私は、十三歳の時に、神のお告を得ました。汝は立つて、この仏蘭西を救はねばならぬと。其れからといふものは、毎日々々、幾度と無く、神は、告げて、早く事を挙げよ挙げよと仰せられます。……で（ママ）。私は、一日も速かに兵馬の権を握り、敵兵を打ち払つて、太子を、仏王の位に即け奉らねばなりませぬ。（下田歌子「ジョアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、1902 年、130 頁。）

『婦女鑑』の「若安達亜克」では「若安の豪胆[33]」が敵を恐怖に陥れ、味方に勇気を与える様子が書かれるなど、本稿第 2 節で述べたような強いジャンヌ像が書かれた。『外国少女鑑』もこの特徴を引き継ぎ、ジャンヌは「幼きより心雄々し」い人物で、比類ない「西洋の女傑」であると書かれた[34]。この『外国少女鑑』におけるジャンヌ伝は、本稿第 4 節で検討するジャンヌ像の特徴があまり当てはまらない。少女向け読み物のジャンヌ・ダルク像が次第に変容するということがこの作品の存在により明らかになる。

②岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』第 5 巻 2 号（1906 年 2 月）

『少女界』は金港堂が 1901（明治 34）年に創刊した日本初の少女雑誌で、同時に創刊された『少年界』の姉妹誌である。博文館の『少女世界』とともに人気を博した。たとえば第 1 巻第 3 号所収の論説に「男子と云ふものは、イザ戦争と云ふ時には命懸の働をして国家の為に尽します。女子は家にあつて男子の事業を援けて、男子が国家の為に尽す手助を

---

30 下田歌子「緒言」『外国少女鑑（少女文庫第四編）』、博文館、1902 年。
31 下田歌子「緒言」『内国少女鑑（少女文庫第三編）』、博文館、1901 年。
32 越後純子『近代教育と『婦女鑑』の研究』、吉川弘文館、2016 年、264-283 頁。尾崎るみ「国定国語教科書にグレース･ダーリングが登場するまで―明治の少女向け読み物の軌跡（九）」『論叢　児童文化』、第 49 号、2012 年、61 頁。
33 「若安達亜克」『婦女鑑　四』、宮内省、1887 年、47 丁オ。
34 下田歌子「ジョアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、1902 年、127-128 頁。

しなければなりませぬ[35]」と書かれたように、雑誌の基調として、将来家庭内で男性を支える女性となるべきことが説かれた。「仏国の女将軍」は約 4000 字の文章で、史実と異なる記述もあり、少女読者に相応しいように手を加えられながら書かれたことが判明する。

③沼田笠峰「ジヤンヌダアク」『少女世界』第 2 巻 7 号～8 号（1907 年 5 月～6 月）

『少女世界』は 1906（明治 39）年 9 月に博文館が『少年世界』の姉妹誌として創刊した少女向けの総合雑誌で、創刊当時の体裁はすべて『少年世界』に準じた。内容は良妻賢母主義的規範に準じ、明治の女子教育に基づく教養、修身、手芸、読み物、投稿欄等の内容で構成された[36]。「ジヤンヌダアク」は主筆の沼田笠峰が二号に渡り執筆し、前編後編を合わせて 9000 字余りの文章となる。分量も比較的多く、歴史的叙述にも紙幅が割かれ、年号や挿話の記述は史実にかなり忠実である。第 2 巻第 7 号掲載の前編ではジャンヌの少女時代からシノンで王太子と謁見するまで、第 2 巻第 8 号掲載の後編ではオルレアンの解放、戴冠式の記述のあと、急転直下のごとくジャンヌが火刑に処せられるまでが書かれる。

④「ジヤン・ダーク」『少女鑑』（金港堂、1910 年）所収

日本、西欧、中国の 32 名の女性の伝記を集めた例話集で「家庭に於いて少女に読ましむべき良書甚だ乏し」という世間の「要求に応ぜん」として編集されたと述べられる[37]。金港堂は、博文館とともに明治時代後期の児童文学出版を牽引した二大出版社のひとつであり、『少女界』を発行した出版社でもあるため、少女向けの例話集の発行は『少女界』の読者やその父兄、教育関係者などの「要求」に応じたものと考えられる。西欧の女性はジャンヌ・ダルクのほかにナイチンゲール、画家のロザ・ボヌール、シャルロット・コルデー、ストウ夫人など計 8 名である。「ジヤン・ダーク」は 1 万 3000 字から 1 万 4000 字の文章で、今回検討する五種の文章の中で最も長文である。しかし、年代の記述がないなど、正確さを期した歴史的叙述よりも、作者が想像を交えつつ書いたと思われる細かな挿話にページが割かれている。

⑤鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』第 5 巻 13 号（1912 年 11 月）

『少女の友』は 1908（明治 41）年創刊の実業之日本社発行の月刊誌で、戦後（1955 年）まで続いた人気雑誌である。創刊からしばらくは『少女世界』を競合誌とし、小学校上級生から女学生に向けた娯楽・教養・投稿が中心の良妻賢母主義教育に沿った内容で構成された。1923 年に雑誌『少女倶楽部』が大日本雄弁会から創刊されて以降は娯楽性を強め、人気を二分した[38]。「女の乃木大将オルレアンの少女」は約 3000 字の比較的短い文章の中に、ランスの戴冠式までが中心に記述される。乃木希典とその妻の殉死（1912 年 9 月 13 日）から約二か月後に掲載された記事であり、「乃木大将と其の奥様とのことは実に、何とも申しやうのない立派なことをなさったもの」であると、殉死の礼賛を基調としつつ、乃木希典のような「忠義な人」が、読者に年近い「十七歳の少女」であったことが冒頭部で強調され、忠君愛国の精神に殉じる少女としてジャンヌ・ダルクが描かれる[39]。

４　少女向け読み物でのジャンヌ・ダルク像の特徴―「女傑」から身近な「少女」へ

本節では、本稿第 2 節で概観した明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌のジャンヌ像とは異なる特徴を持つ、少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクに関する言説を整理し、その中で造形されたジャンヌ・ダルク像の特徴を検討する。

本稿第 3 節でも述べた通り、この特徴は『婦女鑑』のジャンヌ像を継承する『外国少女鑑』所収の「ジヨアンダーク（仏蘭西）」にはあまり見られず、ヒロイン像が徐々に変容したことが判明する。本節では、少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの言説の特徴

---

35 奥村五十子「女子の義務」『少女界』第 1 巻第 3 号、1902 年 6 月、62 頁。
36 日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988 年、379 頁。
37 「序」『少女鑑』、金港堂、1910 年。
38 日本児童文学学会編、前掲書、380 頁。
39 鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』、第 5 巻 13 号、1912 年、18 頁

を次の三点にまとめたい。つまり、①具体的な美しさの描写、②弱さと強さの共存、③「家の娘」としての葛藤、の三点である。なお、本節で作品から引用を行う際には、各作品の掲載雑誌名・掲載書籍名と頁数を、『少女世界』の文章については巻号も加え、丸括弧内に記す。

①具体的な美しさの描写

高山一彦によると、ジャンヌ・ダルクの容貌について裏付ける遺物や史料は存在せず、ジャンヌの外見は現在の歴史学においても謎に包まれている。二十キロはあったであろう甲冑を身にまとい、馬に乗り戦ったことを現実的に考えると、かなり頑強な女性であったはずであり、後代の文学作品・演劇・図像にしばしば見られる、華奢な美少女としてのジャンヌ・ダルク像は「演出者の勝手な創作」であるという。[40]

しかし、現代の日本で出版される児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記において、彼女が美少女だということはまるで自明であるかのようだ[41]。そしてジャンヌの美しさの具体的な描写が児童向けの伝記の中で見受けられるようになったのが、本稿で問題にする明治時代の少女向けの作品群においてである。明治時代中期の少年雑誌であっても、例えば高山林次郎の「ジャンヌ、ダルク」には「容貌秀麗なる一少女」という表現が確かに見受けられた[42]。しかし「容貌秀麗」というたった一語で表されたそれは、彼女の偉大さの表現の一環であるようにも解釈できる。それに対し、少女向けの読み物では、声、髪、軍服姿など具体的な美しさが語られるようになる。

ジャンヌの声の美しさについては、シノンで王太子シャルルに謁見した際に、自らがシノンに来た目的を「言葉爽やかに言上いたしました」（『少女界』56 頁）、「さわやかに申し述べました」（『少女世界』2 巻 7 号、55 頁）、「美しい声で言上いたしました」（『少女鑑』181 頁）と言及される。また、外見についての描写は、次の通りである。

> 金の様な色の房々とした美しい髪を、颯と後ろに垂れて、威風凛々しく馬に跨り、多くの兵隊を率ゐて、シノン府を出発し、オルレアンの城に向ひました（『少女界』57 頁）

> 色が白く、目鼻立が美しく、其上に起居挙動に気品があつたものですから、両親は常にゼハネツト、ゼハネツトと呼んで、掌中の玉とばかりに可愛がつて居りました。（『少女鑑』162 頁）

> ジャンは美しい軍服を着け、黄金色の髪を眉間から分けて房々と肩まで垂れ、肥えた馬に跨って、静に城の門から出ました時は、朝日が其の美く（ママ）しい姿の上に輝いて、敵も味方もウットリと其の武者振りに見とれてゐました。（『少女の友』20-21 頁）

作品によって記述は異なるが、髪、肌、目鼻立ち、馬上の姿、立ち居振る舞いの気品までに至る具体的な描写は、挿絵こそないものの、美しいヒロイン像を読者にありありと喚起させる。少女読者にとって、美しいヒロインとしてのジャンヌは憧れを感じられる存在となり、ジャンヌの伝記の読み物としての魅力も増したと考えられる。

---

[40] 高山一彦、前掲書、『ジャンヌ・ダルク―歴史を生き続ける「聖女」』、94-108 頁。

[41] たとえば学習漫画版の伝記シリーズでは、ジャンヌ・ダルクは被伝者として定番であるが、大きなキラキラした瞳を持つ金髪の美少女がつねに描かれる。これは、美内すずえ「白ゆりの騎士」（『花とゆめ』連載、1974-1975 年）等のジャンヌ・ダルクを題材とした少女漫画の影響も大きいと考えられるが、児童文学の言説のレベルでは、明治時代の少女向けの読み物に遡ることができると考えられる。（cf. 木村尚三郎監修、高瀬直子『学習漫画　世界の伝記　ジャンヌ・ダルク―フランスを救ったオルレアンの乙女』、集英社、1995 年。安達正勝監修、虎影誠『ジャンヌ・ダルク（コミック版世界の伝記）』、ポプラ社、2011 年。安達正勝監修、たまきちひろ『ジャンヌ・ダルク（小学館版まんが人物館）』、小学館、2011 年。藤本ひとみ『美少女戦士ジャンヌ・ダルク物語』、講談社青い鳥文庫、2011 年。）

[42] 高山林次郎、前掲「ジャンヌ、ダルク」、61 頁。

②弱さと強さの共存

少年雑誌ではジャンヌの強さが強調されたのに対し、少女向けの読み物においては、強さとともに弱さも表現されるようになる。

まず、「繊弱(かよわ)い女の身なのにも拘らず」（『少女鑑』167 頁）、「繊弱(かよわ)い一少女の身を以て」（『少女界』54 頁）、「かよわい一少女の身をも忘れ、勇ましく」（『少女世界』2 巻 7 号、51 頁）のように「かよわい」という言葉がしばしば用いられる。またフランス軍の惨状を見て「其小さき胸」（『少女界』54 頁）を悔しさでいっぱいにしたという表現、「坐ろに女子に生れて来たことを情(なさけ)なく思ひました」（『少女鑑』165 頁）という表現でも「小さき」「情なく」という言葉でジャンヌが弱い存在であることが表現される。さらに、「騎士(ナイト)の助力を得て」（『少女世界』2 巻 7 号、53 頁）ジャンヌが逆境を克服し、負傷の際には味方の将軍が彼女を「扶け起して自分の馬に乗せ」（『少女世界』2 巻 8 号、87 頁）たという、周囲の男性に助けられるジャンヌの挿話では、彼女が男性の助けを必要とする「かよわい」女性であることが想起させられる。

そして、『少女鑑』でのジャンヌは頻繁に涙を流す。天使の声を聴いた時、故郷の村を発つ時、ヴォークルールで将軍に自らの話を疑われた時、オルレアンの戦闘での負傷時、ランスでの戴冠式への参列時、コンピエーニュで捕縛された時、火刑に処される直前、の七度にわたりジャンヌは涙を流し、その泣き方についても「身を震はして獻欷(しゃく)りあげる」（『少女鑑』175 頁）というように、「かよわい」ことが感じられる表現も見られる。

次に、強さについては身体的・能力的に優れている点だけでなく、むしろ精神的な強さが頻繁に述べられる。この点は『外国少女鑑』掲載のジャンヌ伝にも共通する。「少女の功績、実に絶倫と云ふべし」「少女が国に報いし希世の功」（『外国少女鑑』136 頁）とジャンヌの功績を称えると同時に、その美点として「幼きより心雄々しく」（『外国少女鑑』128 頁）、「熱心なる容(ママ)子」（『外国少女鑑』132 頁）、「ジョアンが勇気」（『外国少女鑑』133 頁）などの言葉で、ジャンヌの内面の強さ、勇敢さが挙げられた。これは、他の少女向けのジャンヌ伝においても同じである。しばしば書かれたのは、王宮や教会裁判の場で、「少しも臆する色なく」（『少女界』56 頁）答弁したという場面[43]、死を前にして「十分覚悟を決めて少しも騒がず、恐れ」ない様子（『少女世界』2 巻 8 号、90 頁）であり、精神的に追い詰められる場面でも平常心を保つ強さが表される。同様に精神的な強さを表す言葉として、「勇敢なるジヤンヌダアー(ママ)ク！」（『少女世界』2 巻 8 号、87 頁）、「勇敢なる少女」（『少女世界』2 巻 8 号、88 頁）、「勇気に充ち満ちて」（『少女の友』20 頁）と、勇敢さ、勇気が語られ、「熱誠の色」（『少女世界』2 巻 7 号、55 頁）、「熱心に乞うて」（『少女世界』2 巻 7 号、55 頁）、「誠意誠心」（『少女鑑』176 頁）、「強い決心」（『少女の友』20 頁）と、意志の強さも表現された。ジャンヌの性格については、「利発」「男勝り」「活発」（『少女界』54 頁）、「変つたところもありませんでした」（『少女世界』2 巻 7 号、50 頁）、「遠慮勝な少女」（『少女鑑』163 頁）、「忠義な人」（『少女の友』18 頁）など様々である。しかし上述したような、精神的な強さについては、どの文献においても表現されている。

このような精神的な強さと弱さとを併せ持つヒロイン像に、少女を「かよわい」存在と見なした当時の少女観が反映されたことは言うまでもない。しかしそれと同時に、弱さが強さと併せて表現され、弱さを克服して勇敢に戦う姿が提示されることで、ジャンヌのけなげさが表現される効果もある。読者にとっては、ただ強い「女傑」のジャンヌ・ダルクよりも、弱さを克服して使命を果たす「かよわい」少女としてのジャンヌ・ダルクの方が身近に感じられ、自己同一化も容易であったのではないだろうか。

---

[43] 「少しも臆する色なく」(『少女界』56 頁)と同様の表現は、次のように複数誌において繰り返し見られる。「少しも臆する気色なく」(『少女界』59 頁)/「少しも臆する色とてはなく」(『少女世界』2 巻 7 号、52 頁)/「少しも恐れる色とてはなく」(『少女世界』2 巻 7 号、55 頁)/「何の臆する所なく」(『少女世界』2 巻 7 号、55 頁).

③「家の娘[44]」としての葛藤

少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルク像のもう一つの特徴は、家族、とくに両親との関係が書かれる点である。家族との関係に関する記述は、明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌ではほとんどなく、『外国少女鑑』でも見られない。しかし、他の少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記では、ジャンヌは両親と仲が良く、家族に関する記述が見られる。

『少女界』では、神からの「お告げ」について、ジャンヌは真っ先に両親に相談し、「両親は親戚の人々と相談を遂げた上、兎に角従軍を嘆願して見やうと云ふことになつて」（『少女界』55 頁）、ジャンヌを村から送り出した。さらに、ジャンヌは戴冠式の後に「故郷に帰りました」（『少女界』58 頁）とされ、史実とは違い一度故郷に帰ったことになっている。『少女世界』では、ジャンヌは「父母の仰せをよく守り」（『少女世界』2 巻 7 号、50 頁）、神の「お告げ」についてまず父に相談し、父がそれを信じないので、伯父を頼ったと書かれた。『少女の友』でも従軍をまずは父に相談し、父が猛反対し「早くお嫁にでもやつて了ふ」（『少女の友』20 頁）としたので叔父を頼ったと書かれた。

以上の三つの文献では、両親が従軍を許可するか否かに関わらず、ジャンヌはまず両親か父親に従軍について相談しており、両親の言いつけに忠実であろうとする娘だったことが書かれた。また、ランスの戴冠式の後「再びドムレミーの田舎へ退き、静かに羊飼ひの業に従ふ時が来たのです」（『少女世界』2 巻 8 号、88 頁）、「軍服を脱いで早く父母の許へ帰りたいと願ひました」（『少女の友』21 頁）と両親の待つ村へ帰りたいというジャンヌの希望が書かれ、『少女界』ではジャンヌは故郷に帰ったとされた。

『少女界』のように、ジャンヌが両親の言いつけを守ったと記述される場合も、『少女世界』、『少女の友』のように、父母の言う通りに行動することを願ったが、願いが叶わなかったと書かれる場合も、ジャンヌは両親をないがしろにはしない。とくに後者の場合は、「家の娘」としての立場と戦士として従軍すべき状況との間で葛藤がある。こうした葛藤に焦点をあてて書かれたのが、『少女鑑』に収録された「ジヤン・ダーク」である。

この作品においてジャンヌは「兄妹中の愛娘」（『少女鑑』180 頁）であり、両親に「掌中の玉とばかりに可愛が」られていたが（『少女鑑』162 頁）、従軍を父に相談しても取り合ってもらえず、伯父に頼んで村を出た。村を出る際には「お父様や、お母様が待つてゐるから早く帰つて来て呉れるやうに」（『少女鑑』180 頁）と釘を刺され、ジャンヌ自身も「父母のことを思ひ出し度うございます」（『少女鑑』179 頁）と言って、故郷で着用していた百姓服を持参した。戦場でも「一日も早くレーム府で仏王の加冠式を行ひ、［…］懐しい父母と共に羊を飼ひ度い」（『少女鑑』189 頁）と考え、戴冠式後は「心置きなく故郷へ帰り、父母の傍らで暮し度く思つて」（『少女鑑』190 頁）いたが、故郷に帰ることは叶わなかった。このように、この作品の中ではジャンヌは常に、家族への思いと、フランスを救う使命との間で葛藤する悲しい「家の娘」として描かれた。

①～③で見たように、明治時代後期の少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記では、ジャンヌが自らの弱さと、家族を捨てざるを得なかった悲しさとを克服しつつ使命を果たす姿が描かれる。弱さや悲しみを抱えながらも、邁進するジャンヌの姿が清らかで凛々しく、美しいのであり、少女読者が見習うべき模範とされたのである。

明治時代中期の少年雑誌におけるジャンヌ像と明治時代後期の少女雑誌におけるジャンヌ像は著しく異なる。言わば、前者が強く優れた「女傑」を描いたのだとすれば、後者は泣きもすれば悲しみもする中で、自らを奮い立たせて頑張る身近な「少女」を描いた。この変容はどのような背景のもとに起こったのであろうか。

---

[44] 「家の娘」という言葉は、明治時代中期以降の言説空間おいて、家庭内の役割を果たすことが求められた少女を表す概念として久米依子が下記の論文内で用いている。ここでの「家」は成員の相互の愛情で結ばれた近代的家族のイメージで語られる一方で、少女たちにとってはあくまで娘としての「つとめ」を果たすべき規範と義務の場所であるとされる。（Cf.久米依子「少女小説―差異と規範の言説装置」、小森陽一ほか『メディア・表象・イデオロギー―明治三年代の文化研究』小沢書店、1997 年、195-222 頁、とりわけ 196 頁。）

５　ヒロイン像の変容の背景

本節では、ヒロイン像の変容の背景として二点指摘したい。第一に、成人の女性読者を意識した文献におけるジャンヌ・ダルク像の変容である。第二に当時の少女雑誌で提示された新しい「少女らしさ」の概念の影響である。

第一の点について、本稿第 2 節で言及した 65 件のジャンヌ・ダルク関連文献の中で、女性読者の啓蒙を意識した文献は多く、その中でのジャンヌ像が明治 30 年代頃から保守化する傾向が見られた。児童向けの伝記の中でも少女向けのものにはその影響があり、「家の娘」としての側面を持つヒロイン像が造形されたのではないかとも考えられる。

女性読者向けの最初のジャンヌ・ダルク伝は巌本善治が山下石翁の筆名で発表した「女傑アークの伝」（『女学新誌』掲載、1884 年）であり、啓蒙的な婦人雑誌や、『婦女鑑』（1887 年）、『悲憤壮烈　才女列伝』（1891 年）、『泰西婦女亀鑑』（1892 年）など女性向けの教訓書への掲載が続いた。渡邊洋子は「明治 10 年代から 20 年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし、『救国の英雄』という形で女性に社会参加のモデルを提供した[45]」と指摘した。実際に、例えば上述の「女傑アークの伝」は、『西洋英傑伝』のテクストに引用に近い形で拠りながらも、ジャンヌが「国家」に尽くす様子が加筆され、女性読者の社会意識を鼓舞する文章となっている[46]。しかしながら、明治 30 年代以降の文献、例えば『女子之友』掲載の「ジャンダーク嬢の一節」（1901 年）、『婦人くらぶ』掲載の「将に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアンの少女」（1911 年）では、勇ましく強いジャンヌの代わりに、美しく優しいヒロインが登場した。さらに前者ではジャンヌへの求婚者が登場し、彼女が妻としても申し分のない女性であったことが記述され[47]、後者では家に帰ることなく亡くなった点について「これ果してジアンの幸福であらうか」と読者に四度も問いかけられ、ジャンヌは家に留まるべきであったと主張される[48]。

渡邊は、「近代国家にとって女性の力は必要だが、あくまで女性にふさわしい範囲で力を発揮すべきで、その限界を踏みはずしてはならないという教えを世間に広めることが必要[49]」になった時、ジャンヌ・ダルク像は保守化したと述べ、その転換点となる作品として、シラー原作、藤沢古雪訳『悲劇　オルレアンの少女』（1903 年）を提示した[50]。敵軍将校とジャンヌの悲恋という創作的要素を加えたシラーの戯曲のこの全訳が「愛のヒロイン」としてのジャンヌ像の変容に影響を与えたという渡邊の指摘は鋭い。

しかし、筆者はもう一つの転換点となる作品、そして少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記の記述に影響を与えた文献として、『家庭雑誌』に掲載された宮崎湖処子「オルレアンの少女」（1895 年）も挙げたい。なぜなら、宮崎湖処子が独自に執筆したと考えられるこの作品では、大切に育てられた「家の娘」としてのジャンヌの側面が強調され、忠君愛国からではなく、信仰心、家族への愛、王太子への愛を行動原理として戦う少女としてヒロインが描かれたからである。また、宮崎の描くジャンヌは、聖なる美をたたえ、国を救うことに喜びを感じながらも、戦場でもなお両親と村を思い出す少女であり、作品の中で家族のもとに帰りたいという彼女の願いが切々と表現された[51]。少女向けの読み物におけるジ

45　渡邊洋子、前掲論文、9 頁。

46　拙稿、前掲論文、「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ･ダルクの表象」、415 頁。

47　例えば次の一節がある。「あはれ、世界の男子たらんもの、誰か彼女を愛せざるものぞ。[…]我が母に仕ふるハ自己の母に仕ふるが如く、又我れに対して謙譲にして其親切なりしことハいふばかりのことに非りき。[…]かかる婦人と一生を契りなば父も母も我も如何許り楽しからましと。」（勁林園主人「ジヤンダーク嬢の一節」『女子之友』第 86 号、1901 年、13 頁。）

48　澤田撫松「将に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアンの少女」『婦人くらぶ』、第 4 巻 10 号、1911 年、80 頁。

49　渡邊洋子、前掲論文、15 頁。

50　同上、11-17 頁。

51　次の複数の引用の中にその表現がある。「オルレアンの救を感謝して神を讃美し少女の勲功を頌したり。少女は感情の高潮に於て、却て父母の天井を懐ひき。」（宮崎湖処子「オルレアンの少女」『家庭雑誌』第 54 号、432 頁。）/「少女は国王加冠の式に向ひて急ぎたりき。彼は今讃美の海の中にあり、身崇拝の目的たる時にも、心は常に田園にあり、夢は父母の疎屋を巡りき。彼が故郷を懐ふの心は、何物を

ャンヌ・ダルク像を検討した場合、宮崎の「オルレアンの少女」は、その変容に影響を与えた最初の作品なのではないかと考えられるのである。

最後に、少女向け読み物のジャンヌ・ダルク像が、当時少女雑誌の中で見直されつつあった、新しい「少女らしさ」の影響を受けた可能性を指摘して本節を締めくくりたい。少女雑誌の創刊当初、少年雑誌掲載の冒険小説を模した少女冒険小説が人気を博した。久米依子によると、規範を逸脱しない形での少女の冒険を苦心してひねり出す編集者や作者の苦労をよそに、実際の少女読者たちはスリルとサスペンスに満ちた冒険小説に魅了され、「従来の＜あるべき少女像＞から徐々に離反[52]」する傾向にあった。そのため少女雑誌で伝える新しい「少女らしさ」が模索されなければならなくなった。その結果、従来の「温和にして道理に従うこと」、「高潔貞淑」、「分を忘れないこと」という抑制的で内的な規範から、周囲に対して「愛」を持つこと[53]、他者から「愛される」少女となり[54]、外からも「愛らしく」見えるよう外面的にも「愛らしさ」「あどけなさ」を持つことへと「少女らしさ」という規範の転換が起こった。「愛らしい」「あどけない」振る舞いが「少女らしい」とされた一方で「大人らしい」振る舞いは抑制されて、成長を急がず少女のままでいることが求められた。[55]

明治時代後期の少女読者向けのジャンヌ・ダルク像が「女傑」から身近な「少女」へ変容したことは本稿第 4 節で述べた。弱さを克服しつつ戦う美しいジャンヌ、「家の娘」としての気持ちと戦士としての使命との間で苦しむジャンヌの姿は、読者の少女たちにとって憧れの存在であるとともに、容易に自己同一化できる身近な存在となった。そして同時に、当時の少女雑誌が模索した新しい「少女らしさ」について考えるとき、美しく「かよわい」ジャンヌがけなげに頑張る姿は周囲から「愛される」「愛らしい」ものであり、新しい「少女らしさ」を表すヒロイン像に近づいたのではないかとも思われるのである。

６　まとめ

少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記に見られるのは、彼女の何を模範として読者に伝えるべきかという価値観の揺れである。「家の娘」、将来の良妻賢母として、「少女らしく」生きることを説く価値観と、家を出て戦い、忠君愛国の精神に殉じたジャンヌの強さを評価する態度とが併存している。ジャンヌ・ダルクの戦士としての行動への評価と良妻賢母主義的規範との両方を損なうことなく、伝記の中で両立させるために、「かよわい」が強い、アンビヴァレントなジャンヌ・ダルク像が造形されたと考えられる。宮崎湖処子「オルレアンの少女」や藤沢古雪訳『悲劇 オルレアンの少女』は、図らずも表象の転換点として機能し、ジャンヌ像の変容に影響したと考えることもできる。

本稿では少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記五作品を合わせて検討したが、個々の作品を分析するためにはそれぞれの出典や原テクスト、作者固有の思想などを把握しつつ、より丁寧に検討する必要があるだろう。今後の課題としたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和 3 年度～5 年度）の研究成果をまとめた一部である。

も之を移すと能はざりき。」（同上、第 55 号、474 頁。）/「父母の顔、叔父の風容、旧主を歓び迎ふべき牛羊、家庭の快楽、田園の生活、連鎖をなして彼が心眼に浮び来りぬ。彼は今一刻も他郷に止まる心なかりき。然れども不幸にして彼はオルレアンスの救ひ人なりき。[…]涙を飲むで王の留むるに従ひぬ。」（同上、第 55 号、475 頁。）

[52] 久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、216 頁。

[53] 久米依子は、「愛」を持つことを説いた論説として、巌谷小波「愛の光」（『少女世界』第 1 巻 3 号、1906 年 11 月）を挙げた。Cf.久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217 頁。

[54] 久米依子は、「愛らしさ」を説いた論説として、沼田笠峰「少女教室」（『少女世界』第 2 巻 3 号、1907 年 2 月）を挙げた。そこには「皆さんは、赤ん坊らしくもなく、また大人らしくもなく、どこまでも少女のやさしい、あどけない、ハキハキした心を失はずして、至るところで、愛せらるやうにならねばなりませんよ」と説かれた。Cf.久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217-219 頁。

[55] 久米依子、前掲論文、「少女小説―差異と規範の言説装置」、217-219 頁。